

## 連続フォーラム 開催報告書

女性研究者が「地方」で研究を続けるには 大学・企業・地方自治体の役割  
【特別講演】女性の活躍で大学を活性化～性別によらず輝ける組織づくりに向けて～  
【講師】 東村 博子 氏（名古屋大学生命農学研究科教授・男女共同参画室長）  
【日時】平成 28 年 9 月 30 日（金） 16:00～17:30  
【場所】岐阜薬科大学本部 第二講義室  
【参加者数】51 人（うち女性研究者 13 人）

まず、講師の専門領域も含め、男女の生物学的な成り立ちから違いについて、科学者として話をしていただいた。男女を生物としてみると、基本的に違うのは染色体のみで、そこからホルモンによる機能的な差異は生じるが、それによる能力的な優位差があるとは証明できないということであった。IQに男女差はない。平均値の性差と個体にとっての性差があるが、個人の問題と平均値を混同しないことがまず重要であると話された。

これを踏まえ、男女共同参画を戦略的に進めるという面から、能力を平均値として生かすことが組織全体の平均値を押し上げ、結果的に大学（組織）の発展に貢献できる、というお話であった。

キーワードは「多様性」である。組織として柔軟性をもち、要請や変化に柔軟に対応していくことで、個人としての自己実現が容易になり、働きたい人が働き続けられる大学（組織）になっていく。性別ではなく個性で輝くことができ、組織も個性も活性化することができる、というお話であった。

また、最も効果的な戦略は、トップダウン方式で組織全体を動かすことである。講師が所属する名古屋大学においても、現総長がある時期にすべて腑に落ちたため、男女共同参画推進が非常にスムーズに進むようになった。結果的に、女性だけではなく男性にとっても魅力的な大学（組織）になり、非常に効果的な広報活動になっていく、というお話であった。そのためにも、意思決定機関に女性を登用して女性をやる気にさせることが重要である、とのことであった。

質疑応答では、若手男性研究者からの質問が相次いだ。講師との議論も展開され、岐阜薬科大学においては本事業ならびに男女共同参画についての若手男性研究者の意見を聞く機会が少なかったため、非常に貴重で有意義な時間であった。

女性が少数派である現状では、多数派の男性と同じ行動をとってもとらなくても、女性が行動をとる、とらないにかかわらず、どうしても目立ってしまう、という現状を理解することも必要である。

働く者にとって魅力的な大学（職場）にしていくことで、女性研究者も増え、ひいては地方創生につながる。また、多様性を認めながら性別によらず輝ける組織づくりをめざしていかなければならない、という意識啓発につながる有意義な機会であった。

